

大がかりな機構が必要なこと、などの違いがみられる。

まず血液のドネーションにおいては、売買血方式から預血方式、そして献血方式へと変化してきている。その背景には1960年代、供血者の「安全」が損なわれるような事態の表面化があった。それを克服し献血方式へ集約させる過程では、「患者への『贈物』である『善意』の献血が『安全』でないはずがない」とする『有償＝危険』『無償＝安全』の論理が作用したという。

次に、なかなか進展を見ない移植片のドネーションについては、そのこと自体、「人体が何より慣行のなかに埋め込まれて存在」していることを示しているのであって、ドネーションの推進のためには、死体に対する集合的な「風習」「習俗」、ドナーの死の判定法や死体の処分権を持つ遺族の同意をめぐる問題などで折り合いをつけなければならない。移植に関わる法制化が行われたあとは「習俗」などに代って、「献体の意思を尊重」という「本人の意志」が優位に立つようになり、その「意志」がドネーションを引っ張って行くこ

とになる。

そこでは移植片も「限定的な対象に対してではなく、『愛』や『善意』の発露を受け入れる機構に対して提供される」ものとなり、「ドナーとレシピエントの距離は追尾できないほどに隔絶し、実質的には無きに等しく」なる。そして、「献体された『いのちの贈り物』は、将来的に医学の恩恵として『社会』に還元される」ことになる、と意識されるに至る。

以上、少し飛ばしながら概略を試みたが、著者のいささか生硬な言い回しもあって、十分に文意を理解し紹介しえたかどうか心もとない。視点のユニークさは感じられたが、それを丁寧に噛み砕いて伝える工夫が、もうひとつほしかったように思う。私の興味を誘ったのは、前半の解剖体の流通に関する一次資料の部分である。丁寧な注もあり、後学に資するところが大きい。

(新村 拓)

【勁草書房、東京都文京区水道2-1-1、2007年7月、A5判、352頁、3,500円＋税】

トルステン・デッカート 著、大森安恵・成田あゆみ 訳 『ハーゲドン 情熱の生涯——理想のインスリンを求めて——』

伝記として大変面白かった。これはハーゲドンの人生そのものが、波乱にとんだものであり、彼がエネルギーに自分の仕事に励んだからに他ならない。

彼の誕生のころ、膵臓が糖尿病に関係しているらしいとか膵臓のランゲルハンス島から糖尿病発症を予防する物質を分泌していると考えられた。そんな時代に弱冠26歳で一般医として開業しながら、血糖測定法を研究しその学問的な興味をもち続けたことから、ノーベル賞学者のクローと共同研究することになり、プロタミン・インスリンを開発し、ヨーロッパにおけるモデル病院や研究所を設立して、医師であり、化学者であり、製造業者であり、実業家として八面六臂の活躍をした

ことにある。

誰でもこれをまねすることはできないが、学者として実業家として成功した人物像が、興味深く書かれている。

その生い立ちも船長の父のもとで、航海船で生活した特異な生活環境を積極的に受け入れ、開拓魂が培われたのかもしれない。

1922年、インスリンはバンチング・ベストによって発見されたと素直におもっていたが、この書からインスリン発見の業績はマクラウド・コリップにこそあることもよく理解できた。そしてクロー夫妻のアメリカ旅行からえたインスリンの新知見からハーゲドンとの共同研究が始まったのである。

そして1923年にはインスリンの臨床試用が行われ、デンマークにおけるインスリン生産が開始され、ヨーロッパ全体を支配するようになったのである。

ノルデスク・インスリン研究所はクローとハーゲドンの共同研究事業であり、世界的にも知られ、インスリン生産は円滑であった。

ステノ・メモリアル病院を設立し多くの糖尿病患者の治療に情熱をかたむけた。

持続型インスリン開発のためにプロタミン・インスリンをつくり、その販売網は世界全体に広がった。そのために新しいインスリン工場をつくったりした。

第二次世界大戦での混乱は、回復に戦後なお数年を要した。研究開発の停滞を打破するために、

アメリカ旅行、南極海調査航海、新しい病院研究所の設立などをしたが、次第に体力が尽き、パーキンソン病を発症し、車椅子生活となり最後を迎えた。

著者のデッカート氏はステノ・メモリアル病院の高名な医師で訳者の旧知の学者であるという。細かな点まで注釈や文献が入れてあって理解しやすい。一般読者も興味と好奇心で面白く読める一冊である。

(藤倉 一郎)

[時空出版、東京都文京区小石川4-18-3、2007年9月、454頁、3,900円+税]

酒井耕造 著

『近世会津の村と社会——地域の暮らしと医療——』

本書は、2004年5月11日、享年46歳を今生の一期として旅立った酒井耕造氏の著作集である。全体の章立ては以下の通りである。

第一部 博物館の現場から——地域と資料への想い

- 一 古文書の読み方 Q & A
- 二 古文書をどう保存するか
- 三 教育普及図書『ふくしまの古文書』
- 四 「はんこ」と花押
- 五 老百姓と百姓代は同じですか？
- 六 文献にみる地震
- 七 企画展「げんき・病・元気」
- 八 企画展「生の中の死」
- 九 企画展「戊辰戦争といま」

第二部 研究の原点——近世会津の村の組織と諸集団

- 一 郡・荘・郷と組
- 二 郷頭制と地域秩序
- 三 「郷頭家」と郷頭役

- 四 禿百姓と諸集団
- 五 肝煎と惣百姓
- 六 肝煎・地首と老百姓
- 七 兼帯名主の村支配

第三部 研究の軌跡——村をめぐる習俗と医療

- 一 甲斐国都留郡下吉田村の流鏑馬祭礼
- 二 会津の頼母子講
- 三 富士山北麓の薬園と山論
- 四 会津藩における種痘の普及と民俗
- 五 戦国の城のゆくえ
- 六 南山御蔵入領の戦国旧臣と農兵

酒井氏は、地域社会の政治的な地域秩序に関する研究をすすめるとともに、病いと医療に関する課題にも取り組んだ。また、福島県立博物館の学芸員として病あるいは生や死に関する企画展も担当した。

企画展「げんき・病・元気」は、近世から近代を中心に、病氣・医者・病院・薬・マジナイ・信仰・予防・風呂等の関係資料を基として構成さ